

明石秋室の詩・書・人物について(四)

狩 生 熊 義

(贊助会員・佐伯市戸穴)

(五) 秋室の書について

(一) 文長との関係

「書を求むる人に贈る」と自作七律に、

空郎の字癖は詩癖に過ぐ

楮素の佳と悪とを論ぜず

興来りて一揮すれば風雨快し

龍梭りゅうさ躍起す陶家の壁

巧媚時俗に随う能わず

奔散直ちに追う田水の月

神有りて法無し君猜む勿れ

我亦字林の一俠客。

この詩は明代の文人徐文長の詩に倣って作ったものらしく、内容も考え方もよく似ている。徐文長という人は一五二一年生れ七十三才の生涯を諸生で送った文人だが

中国日本に大きな影響を及ぼした人で、詩書共に一流の名手、文も達人で、画は自ら一家を成す、山水、人物、花鳥、竹石、皆超越している。

三絶と称する法——詩書画を一幅に一体として調和構成する工夫を創出した——特殊の境趣を創造した創始者と云ってもよい人である。池大雅、谷口蕪村、田能村竹田等の人々が之を継承し工夫して天明から文化文政へ、幕末から明治に迄この流れが及ぼした影響は偉大なもので、その文化業績は高く評価されている。

文長は「吾は書第一、詩は二、文三、画四」と自ら称し識者も之を認めたという程の人、殊に行草書は精偉、奇傑、運筆を主とするも、大概それを米芾よつに仿えりと陶望齡が評している。又袁中郎は「筆意奔放なることその詩の如し、蒼励の中に姿媚躍出するは王雅宜、文徵明の

上にあり」と激賞している。王雅宜とは王寵の事、文徵明、王寵は当代を代表する書家だがその上にありと迄賞している。

文長は李長吉の詩を学び最もその真髓を得ていると秋室も賞している。その故を以ってか秋室は文長に心を寄せて彼の書を学んだのだろう。文長も秋室も共に米芾の書を学んだ。

米芾の書は殆どの学書者が皆学ぶので珍しくはない。山陽父子、叔父杏坪、古賀精里、市河寛齋、米庵の父子、石井潭香、井野勿齋と教え挙げれば違がない。只其の学び方如何で結果は大変異なるものである。

袁中郎の文長評に「文長の書は八法の散聖、学林の侠客なり」とあるが秋室も「我亦字林の一侠客」と之に応じたのである。

巧媚時俗に随わずという文長と同じく秋室も時俗に媚びず、奔散直ちに追う田水の月というのは、直進文長を追求めるという意味である。文長の名は渭と云い之を分折して田水の月と文長は自署していたのである。

有神無法というのも二人共通した書風といえる。固有の精神有りて一般書法に従わずという意味である。

斯くの如く秋室は詩も書も画も、文長を目指して研鑽し独自の境地を開拓した訳である。

前述の三絶は三美とも称し、この法を主張する文人一派の人々は、伝統に従わず自由奔放に自己を表現することを目指す粗放な書画風の持主であり、徐渭も亦其の代表者だが、米芾は元来左程粗放なものではない。

秋室はこの両者を学び、ある時は粗放な面を、ある時は温和な面を見せているのは、前両者の何れかを意識して書いた結果の相違であろう。

(二) 秋室の書風の分類

一、杵築時代——三浦梅園の長子黄鶴に学んだというだけで、その筆蹟は殆ど現存しないので、实体は不明というところ。

二、廿代——最年少時の現存資料は廿三才「煙雨樓」の写本である。丹精こめた細楷で整然としている。当時の人々は写本をよくしたが、廿代の書としては熟練し過ぎてゐる。勿論晩年の面目はないが見事な出来栄だ。

三、卅代——書物奉行時代最読書最書写時代
佐伯文庫献上目録、錦囊遺彩稿

緑玉山房備忘録、四教堂出仕中諸揮毫

(唐歐陽詢書に基くもの) — 端正

四、四十代 — 米芾の影響多き時代

1. 鶴鶴年寿斉 — (米芾蜀素帖) 米芾の書風とその特色を自己の姿に創作していた時代で端正と飄逸とを兼ね合せている。

2. 「湘中慢抄」は四十二才の自己の書風が形成されつゝあるが米芾を離れない — 熟練。

3. 此地有崇山峻嶺茂樹……王羲之蘭亭序の一節、米芾が書いた蘭亭かと疑われる程、只極端な肉太と細線との調和に工夫をしていた秋室の面目躍如 — 四十八才練達の書。

五、五十代 — 円熟練達の書

南軒苦篁歌、竹と巖との図。

文長三絶の画中賛を工夫した作風、之は明代に源を發し清朝に盛に行なわれた文人画の様式。之に秋室も傾倒して行った。

六、六十代 — 晩年自家風を完成した時代。

楷行草何れを書いても自家の風を完成している。王羲之でもなく、米芾でもなく、徐渭でもなく何れもが融

和して渾然一体をなし、奇特的な秋室の書風が形成されている。伊藤東海が「明・清の大家に比して遜色なし」と賞嘆したのもこの頃の作であろう。

(三) 秋室の特色

明清の諸家と云っても一家を成す者を指すのであって、そう沢山ある訳ではない。

師家の流派を学んでもその名残りを留めず、独特の妙味を含まねば駄目、独特と云っても我流では通用しない。我流でなくて独特と云うのは誠に曰く謂い難いのだが、未熟な個癖を露出しては嫌味にこそなれ一家とは言い難し、師風を離れてそれ以上の妙味を含むという事は容易なことではない。

秋室は正にその代表、師法を留めず、俗に墮ちず、深々たる妙味を極めて個有の持味を出している格調高い書風は誰も真似の出来ないところ、——彼の作品には殆ど署名が無いが、無銘であつてもすぐ判る。——試みに誰でも真似が出来るものならして見よと云わんばかり、王鐸の如き名人でも彼は何年何月何日と明記して自署しているが、秋室にはそんな必要がないのである。

秋室は最も私淑した李長吉の書風は学ばなかったか？
— 長吉は早書きであったと伝えられるが名手とは云わ
れていない。

恐らく乱雑に自分のメモ程度の記録法であったのだら
う。従って学ぶべき手本はない。

四 その他の影響

然らば秋室は米芾、歐陽詢、王羲之、徐文長、等の外
の人から学んだものはないか、いまひとりと、楊廉夫（鉄
崖と号す）がある。この人は李長吉の詩流を汲む人の中
の傑物である。文長以前では詩人として書家として第一
級の人である。然し稍粗放で奔放な書風である。威勢が
良いと云えば良いが乱雑横暴な書と云える。之は硬毫筆
の為かと思うが明代に筆墨の製法が変わったので書風が一



佐伯市 山中道夫氏藏

変した。それ以前の人に硬剛の書が多いのは製筆法の関
係だろうと私は思う。この人の影響が秋室にないとは云
えない。秋室はこの人の詩を可成り高く評している。

秋室の書に奔放な一面があるのは、この人の影響があ
ると見るのが妥当な気がする。

奔放な一面はあっても決して粗放ではない。洗練され
た落着きのある線の妙味はむしろ楊鉄崖より上であると
思う。

五 秋室の傑作

何と云って秋室の傑作は「光風払々……」の詩を書いた
作品である。上掲の写真であるが、「秋夜涼甚しき時、
徐媛の詩を読み因って媛に擬して作った」という前書き
がある。詩もよいが書は更によい。

徐媛という人は明の万暦年間の進士范允臨の妻
である。『絡緯集』という詩集があるが之を読ん
だ時の詩だろう。范允臨という人は書画共に名手
で董其昌とその名を斉しうしたというから当代の
トップであろう。徐媛はその妻で徐文長とは関わ
りは無い。

光風私々の書は秋室の書風を代表するものだが、縦線の太いのが著しい特色、最晩年にはこの特色は消えて老境に入った最高の境地を示しているが、この書は準晩年とも云うべく瑰瑋という評語にピッタリである。

五十才以降の書は晩年の形体を既に完成して居り、七十で隠居する迄の廿年間の書は、まさに古今独歩の妙品が多い。

殊に六十四才の「豹は駭く……」の詩、六十六才の「端州石匠巧神の如し」という長吉の詩を書いたものは、秋室最高の出来栄えで見事な絶品である。

丙 秋室の書の評価と相対性

凡そ書画に限らず物の価値を決定するというのは、相対的であつて決して絶対的なものではない。如何に高価な立派なものとも雖も更に高度なものに比すれば二流品となる。

嘗て明治の書聖と云われた日下部鳴鶴が、初めて貫名ぬきなの書の価値を説明するのに「三筆三蹟以後第一に推さざるを得ず」と心経跋文に激賞してから俄然貫名の名が高くなつたが、その貫名を同時代同じく京都に住んでいた

頼山陽は「坊や今日の清書は良く出来た」という程度だと酷評している。尤も同じ作品を見た訳ではないが見る人によつてこれ程異なる。

この両者の評は共にそれぞれ当を得ていると云えるように思う。価値は相対的だから、私がどんなに秋室を激賞しても三文の価値も認めない人もあり得る。可憐なすみれも絢爛たる牡丹の妍と何れが貴いか言難い。

花紅柳緑以て春を成すというべきもので人の好みに任せばよいという訳だが、芸術品は単に自然そのままではない。牡丹と萼には程度の差、上下の別は無いかれども芸術品には上下の別、程度の差は常につきものである。

境地に上下の別があり、技量に程度の差が生ずる。一品一品皆異なるから一概に誰の書画はよいとか悪いとか評し切れない。

王羲之と雖も生涯を通じて傑作は唯一つ、蘭亭序だけだったと聞く。最高最良の条件の時の作であり、生涯一品出来ればよいと云う。三筆の一人橘逸勢の如きは伊都内親王願文が前にも後にも唯一つしかない。にも拘らず三筆の名を今に伝えて変らない。

だから山陽にも貫名にも秋室にも出来不出来は常にあ

り、傑作は生涯を通じて唯一つでよいのである。

秋室四十八才の書に王羲之蘭亭序の一節が書幅になっている。初唐三大家以来米芾も東坡も王羲之を学んだのであるから当然秋室も学ぶ。――ましてや王羲之の傑作中の傑作と云われるものである。――然し秋室はこの時既に遍平な筆法の秋室の書風が出来ている。古典臨書の稽古法に二種類あって一はそのまま生写しする同一形式法と、他は何れを学んでも皆自己風に消化する形とである。

秋室は後者であって、自己を主張するタイプの人と云うべきか。

少年期黄鶴の書を学んだがそれに留まらず、後に歐陽詢を学んだがその神を取って形に拘泥せず、或は徐文長の新奇に学び、又楊鉄崖の奔放を取入れて之に止まらず、溯って晋の王羲之の真草に真髓を求めつゝ、それにも止まらず、何れの長所をも十二分に消化しつゝ、而かも前人未発の奇創の境地に到達して、秋室独特の妙味ある書風を形成したということは、偉大な業績と云うべきである。同じ米芾を学んでも、頼春水は粗放な形に捉らえて元氣発瀨と思ひ込んで居り、長子子成に之を教えたので、

子成（山陽）も卅八才迄はその書風を受け継いでいた。山陽程の才子でも最初受入れた書風というものは簡単に は抜け得ず、卅八才迄はそのまゝ自己のものとして了っていた訳である。之を意識的に脱却して、一変して生涯の彼の書風を完成するには英断を要した筈である。かくして出来上って彼の書風も日本人特有の和臭があると云われるに至っては、完璧を期す事は至難の業と云うべきである。

秀才中島子玉ですら自己のものは出来ていない。最も私淑した山陽の書風に懂れてそれを学びそれを自己のものとしたが、山陽の域を脱する事は到底出来ていなかった。

当時の大学者広瀬淡窓の書も、生真面目な儒者の上品な書であるという特色だけであり、天下の大学者で書家だった篠崎小竹（本県出身大阪在住）も熟練した達筆というだけで、創作的分野に於ける第一人者ではあり得ない。

秋室はその点独創の境地は他に例を見ない。頼山陽から詩の添削は受けたようだが書は学ぼうとはしなかった。帆足萬里は書にも独特の風格を示しているし、詩の名

人でもあった。秋室は萬里に詩の添削は受けたが書の指導を受けようとはしなかった。

山陽も萬里も屈指の名筆である事は天下周知のとおりだが、此の兩者何れにも学ばなかった秋室は、自ら持するところ高く、より強い何物かを持っていたからだと推測されるのである。何処の誰にも片寄らず、自らの道は自らが拓いたというのが秋室の書だと云うことが出来る。

習い抜いた熟練さを持しつゝその中に誰の片鱗をも残していない。我流に非ずして師法を脱し、さらにプラスしたアルファ―は、他に類を見ない超脱の絶品に到達したと云うことが出来るのである。

(七) 秋室と良寛・松翁・梧竹

良寛の書は唐の懷素と小野道風の書を学んでその痕跡を留めず、独自の境地を開いたところが勝れているので、最近では三筆三蹟の次に位置しようといふ高く評価されて来たのであるが、良寛の書は明らかに懷素の痕跡を留め、仮名は道風の秋萩帖あたりの風格を残存している。然し良寛独自の風格は確かに發揮し、人柄から感じられる穏やかな魅力は多分に含蓄している。新潟の良寛堂を訪ね

てその多くの肉筆を観賞すれば誰も共通に感ずる。

米庵が越後に良寛を訪ねて書風が一変したと云われる程、人の心をうつものがある。

その良さは認めながらも懷素や道風の痕跡を拭い切れない事を私はこの眼で確めた。

秋室はこの点あれ程学んだ米芾の片鱗を少しも留めていないという点に超脱したものを感ずる。

むしろ天下の第一人者と云われていた文徵明や、董其昌の方が米芾の名残りを多く留めていると云えるのである。

その点鳴鶴は松翁を褒めて「唐宋を超えて溯り山陰の室に入れるものか」と賞讃した。

山陰の室とは山陰侯王羲之を指すものであり、王羲之の室に入る程の出来栄えを讃えると共にその形体は羲之の片鱗を留めずと云っている。だから勝れているという論法である。

それだけでなくは一家を成すということは出来ないということは同感である。

ここに筆は秋室を以て文徵明や董其昌、良寛、松翁等と比較して優品を競う意味ではないが、誰の前にも堂

々と出せる恥ずかしくない書として推奨したい。

文化・文政年間は多趣多様な文人墨客が輩出して妍を競った時代で、その功績は顕著で偉大なものと云うべきである。

日本人らしい文化の花の咲き誇った時であるが、私はそれは日本人らしさという意識が多過ぎて、何処となくせせこましいスケールの小さい書を形成していて、その為には明清の中国人の書と比較すれば物足りないものがあるのを否定出来ない。

最近の書道界の趨勢が明清時代の書風に憧れて、猫も杓子も皆之に傾倒しているのは聊か行過ぎを感じつつも首肯出来るものがある。

遺言に基き師碑を書く為態々中国に渡って完成した時「勝ち得たり字内第一の名」と感激を語り、和漢を通じて第一人者となった中林梧竹翁の如きは、日本人の中から誇るべき存在と云うべきである。

梧竹以外に明・清兩朝を通じて中国人の中に出せる人は秋室だと云っても過言ではない。

Ⅱ 結論

頼春水、山陽父子は近世日本の誇るべき学者で書家である。学者の立場を抜きにして、専ら書家の立場で之を見れば、共に米芾を学んだ名筆であると共に、近世代表書家の第一級人であろう。然し両者共日本人臭がある。

両者共に大和男の児の面目を誇りとしていた最も日本人らしい日本人だったからそれも当然であろうと思う。特に父春水には米芾を学んでその乱暴な迄に雄壮な面を強調している。然し米芾にはそんな力みはないのである。山陽は之を学びつゝ後年は父のこの姿を離れ自らの書境を招いた。彼自らが卅八才を境として書風が一変したと称している。

然し日本人特有の臭味は脱け切らない。

之を俗に和臭と呼んで居たが——その和臭の由来は何かと悩み抜いた私は、フト筆墨の製法の相違に由来する事に気付いた。

文化文政頃の人、いや幕末、明治初年迄の人々は中国の製品を使う事をしなかった。いや出来なかった。山陽や小竹に現代の中国製品を使用させたらどんな書を作ったかと思うのである。もっと多くの珍品があったらう。

金農の如く筆尖を切つて特異な書風を創作した人もあ

るから、種々の工夫をして新味を出す努力をしたであろう。

秋室は其の当時としては誰もが使用した日本筆で日本風の書を書かず、中国風の書を書いている。——因つて来るところは李賀だと思ふ。李賀の詩風は無比、世間一般の語を使わず、独創した。それ故に早く天上に召された短命だったが、その創奇意欲が秋室の書に開発されたのではないかと思ふ。

私は戦後帰郷して第一に着手したのが秋室の書の研究だった。それもその作品年代別の分類が目標で目的であった。

それを調べる為にはどうしても、彼が詩に没頭した内容を明らかにする要に迫られて多年の月日を費した。然しその横道の道草は測り知れない大きな収穫であった。

その源は佐伯文庫の『文献通考』の中にある李賀篇五巻を秋室が通読したところにあった。

それは当時の人々の目には到底触れ得ない貴重な珍本であり、之を読んだ人は当時の人には殆ど無かつた筈である。

若干の読者があつても、それは詩才を養うための資料

として利用されていた。そして詩人は百家鳴争、百花繚乱と咲き誇つた文化文政の時代である。

『南豊名家詩選』に基いても玉山、梅園、淡窓、萬里、愚山、空桑、雲華、竹田、五岳、子玉等廿名家を始め、中央には山陽、竹山、小竹、江戸林家一門の名家雲と湧き出で、敢て秋室の詩を特別に誇示するに及ばない。

然し秋室の書は拔群と云つて憚らない。

敢て推奨するに価する存在であることを強調する。

こう云えば聊か過賞のそしりなきに非ずというやも知れず、兎角郷土史家というものは管見独善の多いもの、我田引水の癖なきに非ずであるが、眼を大きく中国に及ぼして、試みに明・清の諸大家の書に比較して見ればすぐ解る。

日本人から見れば無名の人に属す明代の官吏万曆前後の多くの進士の書が黄檗山万福寺に宝蔵されている。黄檗僧に依つて渡来した明人の書である。この人達の書が日本人の一流書家のどれよりも超脱の趣を宿してスケールの大きさが違ふ。ところがその中に秋室の書を入れて見れば甲乙優劣を誰がつけ得ようか。玉石混淆という言葉があるが玉石の別を誰がつけ得よう。

目明千人盲目千人というが、千人の目明を当てにして一人の識者を無視するなと云った人あり。虚名をうって笑を買うなども云われるが、先に論じた良寛の書の素晴らしさと今尚高い評価を受けたのは誰が評定したのだろう。米庵が褒め初めたからだけではなからう。昭和初頃迄は良寛はひょうきんな無邪気な坊さんで無心に書いたから脱俗でよいという程度の軽い評価しか受けていなかったのに。それ以上も甚しい、三筆三蹟に次ぐというのは何故か、誰が、いやそんな達識が居るならば秋室の書を一度ご覧頂きたいと思うのである。

さりとして世間は広く不思議なもので、文徵明や董其昌、王寵にも劣らぬ程の徐文長が案外知られず塵を蒙り去った如く、秋室も百年以上塵を蒙っていた。泡の如く生じ泡の如く消え去る世の常なれど、百年、二百年後には必ずその真価を知られるもの、見るべき人が見れば必ず再び世に浮かび上る筈である。

貫名が然り、良寛然り、中国よりも日本で高く認められた張瑞図亦然りである。

中林梧竹の如き実力者の名が高まれば高まる程秋室の名が世に出る事を信じて疑わない。

聊か論が脱線した観が無いでもないが明石秋室の書についての所見をこれで終ります。(つづく)

……表紙に思う。……

東光庵の桜

所在は、佐伯市黒沢区桐ヶ原の東光庵境内。塩竈^{しほがま}桜と呼ばれ開花は染井吉野より十日ほど早く毎年三月下旬には満開になる。

この桜は、「黒沢の桜」といって旧藩時代から有名で近在や城下などから花見客が杖をひいたと伝えられている。文豪国木田独歩は『欺かざるの記』に桜見物のため黒沢を訪れたことを記しているし、又佐藤鶴谷も『佐伯誌』に「桐原の桜樹」と記して絶讃している。

古来多くの人々の哀歓を見守り、独歩も賞で鶴谷の筆にのった当時の樹は、大正三年八月台風のため倒れたが今は二代目が立派に成長して、春毎に庵の前庭を覆うて咲き乱れるさまは、昔の姿を彷彿させる眺めである。

因みに、現在の幹周りは、向って左が一米八十糎、右の方が三米七十糎ほどである。

染 矢 勘 蔵

(佐伯市青山)